

『源氏狭衣百番歌合』の研究

～配列を中心に～

A Study of “Genji Sagoromo Hyakuban Utaawase”

～Mainly the array～

文学研究科人文学専攻博士後期課程在学

山本美紀

Yamamoto Miki

はじめに

I. 番のつながり

II. 哀傷部の配列

III. 『源氏狭衣百番歌合』の成り立ち

おわりに

はじめに

『源氏狭衣百番歌合』は100番、200首から成る、ひとつの文学作品である。古く、藤原定家の撰とする説があったが、¹昭和30年に紹介・翻刻された、定家自筆本（穂久邇文庫本）によってそれはほぼ確定した。²原本の上下2冊には、上冊の表題に『二百番歌合』とあって、『源氏物語』と『狭衣物語』の歌を番えた上冊『百番歌合』と、『源氏物語』と『夜の寝覚』以下10篇の物語の歌を番えた下冊『後百番歌合』から成る。題材となった物語の名前から、上冊は『源氏狭衣百番歌合』や『源氏狭衣歌合』、下冊は『拾遺百番歌合』や『拾遺歌合』とも言われる。以降、本論の中では、分かりやすさから上冊を『源氏狭衣百番歌合』、下冊を『拾遺百番歌合』ということにする。

歌合とは本来、歌人を左右のグループに分け、同じ題の歌をそれぞれに詠ませ、その歌を1首ずつ組み合わせて、勝敗を判者が決める遊戯であった。そしてその遊戯を文章化したものが、『亭子院歌合』や『天徳四年内裏歌合』である。しかし、実際に行われたものではないが、現在名を残す歌合もある。藤原公任撰の『前十五番歌合』などである。これらは先に挙げた歌合とは異なり、ある人物（撰者）が、その人が決めた規則のもとに歌人あるいは歌を選び、それを左右に振り分けて結番させ、優劣を競うのである。勝敗は記載されているものもあるが、明記されず読者に一任されることもある。いわゆる、前者が文学的遊戯であるのに対し、後者は文学作品である。そして、『源氏狭衣百番歌合』はその文学作品に分類される。これは、定家が『源氏物語』と『狭衣物語』の歌を独自で選び、左右

に振り分け結番し、部立したもので、公の場で行われた文学的行為ではない。今、私たちは、これを文学作品のひとつとして鑑賞しているのである。

『源氏狭衣百番歌合』は決して有名な作品ではない。故に先行研究も少ない。その研究は成立や番の構成、収用本文の性格についてなどを述べているものが多いが、そのほとんどは、『源氏物語』と『狭衣物語』を同等のものとして考えているように思われる。はたしてそれは正しいのだろうか。ここにこのような定家の言葉がある

近代の人、源氏物語を見さたするやう、またあらたまれり。或は哥をとりて本哥として哥をよまむ料、或は識者をたてゝ、紫の上はたか子にておはすなといひあらそひ、系図とかや名づけてきたありと云々。ふるくはかくもなかりき。身におもひたまふやうは、紫の父祖の事をもさたせず、本歌をもとめむとも思はず、詞つかひのありさまのいふかぎりもなき物にて、紫式部の筆を見れば、こころもすみて、歌のすかた、詞の優によまるゝや、文集の文此定なる物にて、文集にておほく哥を読なり。筆のめてたきか心はいかさまにもすむにや。

(「京極中納言相語」 新典社『松平文庫影印叢書 第17巻』P12)

これは寛喜期(1229~1231年)(定家68歳~70歳)のころに、定家が門弟に語ったものである。この時の定家は晩年期にあたり、和歌や文学に対して熟成しきっていた時期であった。定家は『源氏物語』の芸術性を評価し、この評価はその注釈書である『源氏物語奥入』に反映される。このように、『源氏物語』に対する定家の立場は明確であるが、『狭衣物語』についてはどうなのだろうか。一見する限りでは、『狭衣物語』に対する評価は見当たらない。唯一、この『源氏狭衣百番歌』においてのみ、伺えるだけである。そのため私は、この『源氏狭衣百番歌合』は、『源氏物語』に重きを置いた、『源氏物語』の歌が勝の歌合ではないかと考える。本論では、『源氏狭衣百番歌合』の本分の配列を中心にそれについて考察を進めていきたい。

I. 番のつながり

『源氏狭衣百番歌合』には番が繋がり、贈答関係になっている箇所がある。次に挙げてみよう。³

⑦5番と6番

5番

左 朱雀院行幸の試学のある日、藤壺に

物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振りし心知りきや (紅葉賀)

5番

左 朱雀院行幸に先だつて(宮中で身重の藤壺中宮を慰めようと桐壺院によって催され、光源氏が青海波を舞った) 試楽での翌日、藤壺中宮に 光源氏

深い思いで、立って舞うことなどできそうにない私が、あなたのために袖を打ち振って舞った、その心中をお

察してくださいましたか。

6番

左 「袖うち振りし」と侍りける御返し 入道後の宮

唐人の袖振ることは遠けれど立居につけてあはれとは見き (紅葉賀)

6番

左 「袖うち振りし」とありましたご返事に 藤壺中宮

唐人が袖を振るといふ(趙高飛燕の)故事などはよく存じませんが、舞の所作ごとにしみじみと感慨深く拝見しました。

④ 11番と12番

11番

左 夕顔の君いさなひ出でて、なにがしの院へおはせし暁

いにしへもかくやは人のまどひけん我がまだ知らぬしののめの道

11番

左 夕顔の女君を誘い出して、某院へ行かれた折の暁に 光源氏

昔の人もこのようにさまよったのであろうか、私が今まで知らなかった夜明けの、恋の路を。

12番

左 「かくやは人の」とのたまひし御返し 夕顔の女君

山の端の心も知らで行く月はうはの空にて影や絶えなむ

12番

左 (光源氏が)「かくやは人の」とおっしゃったご返事に 夕顔

山の端がどんな気持ちなのかも知らずに、そこへ入るのを目指して行く月は、もしかすると中空で姿が消えてしまうかもしれません。

⑤ 15番と16番

15番

左 心ならず御覧じそめたりける人に遣はしける

ほのかにも軒端の荻を結ばずは露のかごとを何にかけまし

15番

左 (空蟬の仕打ちによって)心ならずも親しい関係を結んだ人(軒端荻)に贈ってやった(歌)

光源氏

ほんの少しでも、あなたとあのように軒端の荻を結び、約束をしなかったならば、露のようなちょっとした恨み言ですら、何にかこつけて言うことができたでしょうか。

16番

左 「露のかごとを」と侍りける御返 伊予介朝臣の女

ほのめかす風につけても下萩の半ばは霜にむすぼほれつつ

16番

左 (光源氏の)「露のかごとを」とございましたご返事として 軒端萩

(私との間を)ほのめかすお手紙をいただくにつけても、萩の下葉が霜に当ってしおれるように、私は半ば思い乱れております。

㊥ 23番と24番

23番

左 右のおとど、女二の宮に通ひ始め給ひけるころ、うへにきこえける 藤典侍

数ならば身に知られまし世の憂さを人のためにもぬらす袖かな

23番

左 右大臣(夕霧)が女二の宮(落葉の宮)に通ひ始められた頃、(年来夕霧の愛人であった藤典侍が)奥方(雲居の雁)に申し上げた(歌) 藤典侍

私が人数の身であったならば、自分でも身に染みてよくわかったであります。夫婦仲の辛いことも、私ではわかりませんので、あなたのために涙で袖を濡らしております。

24番

左 藤典侍、「身に知られまし」ときこえたる返りごと 右大臣の上

人の世の憂きをあはれと見しかども身にかへんとは思はざりしを

24番

左 藤典侍が「身にしられまし」と申し上げてきた返事に 雲居雁

他人の男女の仲の憂さを辛さをお気の毒だと思ったことはありますが、まさか我が身に換えようとは思ったことがありませんでしたのに。

㊦ 27番と28番

27番

左 玉鬘の尚侍、内に参りたまはむこと近くきこえしころ、霜深き下折れにつけて 前兵部卿

親王

朝日さす光を見ても玉笹の葉分けの霜を消たずもあらなむ

27番

左 (熱心に求婚していた)玉鬘の尚侍が内裏に出仕なさることが間近になってきた頃、深い霜にあってしおれた笹の下折れ枝に付けて 蛸宮

朝日の射す光（帝）をご覧になっても、玉笹（であるあなた）は、葉を分けて下葉に置く霜（である私）を消さずに（忘れずに）いてください。

28番

左 「葉分けの霜を」と侍りける御返り 玉鬘の尚侍
心もて光に向う葵だに朝置く霜をおのれやは消つ

28番

左 （蛭宮が）「葉分けの霜を」とおっしやってこられたご返事に（この方だけには直筆で） 玉鬘
自分から光に向う冬葵であってさえも、朝に置く霜を自ら消すでしょうか。まして私は心ならずも出仕する身、あなたを忘れることはございません。

これらの例は明らかに贈答関係とわかるもので、他にも、贈答関係にはなっていないが、前の番と関連していると思われる並びもある。

2番

左 弘徽殿の三の口にて、朧月夜の尚侍に
深き夜のあはれを知るも入るつきのおぼろけならぬ契りとぞ思ふ

2番

左 （南殿の桜の宴の後）弘徽殿の細殿の三の口（第三間の戸口）で（「朧月夜に似るものぞなき」と口ずさんだ）朧月夜の君に
光源氏

あなたが夜更けの風情をお感じになるのも、入る月のおぼろげなさまをご覧になってのことでしょうが、（その月に誘われてやってきました）私との因縁はひとかたならぬものだと思います。

3番

左 三の口にて 尚侍
うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思う

3番

左 細殿の三の口で（相手が光源氏と知り心を許すが、光源氏の、名を聞かせてほしいとの言葉に対して答えた） 朧月夜の君

この世に生きているのが辛い私のからだか、このまま消えてしまったならば、あなたは私の名を知らないからといって草の原（墓場）をお訪ねにはならないおつもりですか。

4番

左 朧月夜に尚侍の取り替へたまへりし扇に書き付けたまふ
世に知らぬ心地こそすれ有明の月の行方を空にまがへて

4番

左 朧月の夜（桜の花の宴の日に）、朧月夜の君と（逢瀬の証として）取り替えなされた扇に書き付けなさる
（歌） 光源氏

今まで経験したこともないほどやるせない気持ちがすることです。有明の月の行く先（あなたの素性）を空に見失ってしまつて。

そして、これらで特徴的なのは、このように連続の番で、こうもはっきりと関連性を感じさせるのは、左の『源氏物語』歌だけであるということである。右の『狭衣物語』歌もないわけではないのだが、巻が異なっていたり、番が連続になっていなかったりと『源氏物語』歌ほど顕著ではない上に、数も多くはない。

これについて、樋口芳麻呂氏は10番までの歌を取り上げ、詳細に検討されている。⁴そこでは、番と番内部の歌語や内容に共通点を求め、それによってどのように歌が配列されたかを考証されている。そして、その多くの場合、前の番の左歌が次の歌の左歌を呼び起こし、また、番内部では左歌から右歌へと展開されている。しかし氏は、同論の中でそれとは異なる見解も示されている。一部を引用してみよう。

次に、8番から9番への展開であるが、8番右から9番右へであろうか。なぜなら、

ア、9番右歌は、8番右歌同様、狭衣が源氏宮を思慕する歌である。

イ、8番右歌は、狭衣が源氏宮に「在中将のきむをしへたる所かきたるゑをたてまつらせ給とて」（詞書）よんだ歌であり、一方、9番右歌は、源氏宮から琴を弾くことをすすめられた際に狭衣がつぶやいていた歌で、ともに琴が深い関連を持っている。

の2点で2首は共通しているからである。ただし、8番右歌が9番左歌を導き出したとみられぬでもない。なぜなら、

ア、8番右歌も9番左歌も、ともに兄の立場の人間が妹に恋をしている歌である。

イ、歌合の詞書には明示されていないが、物語ではともに夏の季節を背景にする歌である。

という点でやはり共通するからである。いまはいずれと断ずることを控えたいが、8番・9番は、

8番左歌^①→右歌

↓^②

9番左歌^③←右歌

か、

8番左歌^①→右歌

↙^②

9番左歌^③→右歌

の順序で選出されたのではなかろうか。

そして、まとめとして次のように述べられている。

以上、1番から10番までの歌を取り上げて配列を考えてみたが、本歌合は、

ア、番われている左右の歌には、表現や事柄において共通する点や相似の点が明らかに看取される。そして、左歌からの連想で右歌が引き出されたかと思われる場合がほとんどである。

イ、次番への推移も、展開の脈絡がたどれるかと思われる場合が少なくない。そして、左歌が次番左歌を選択させたかと想像される場合が大部分であるが、右歌が次番の左歌を想起させたのだらうと推測される場合も少数ながら存し(右の10番まででは2、3番である)、右歌が次番右歌を呼び出したとみられる場合も皆無ではないようである。

とみてよいのではなかろうか。左歌が重んぜられていることは明白である。右歌からごく自然に左歌が思い浮かべられる場合を除けば、左歌に立ち戻って、左歌から次番左歌を選出しようとする傾向があったといえるかもしれない。本歌合における配列は、右の10番からでも推察されるように、連想などにより自然に巧妙に行われている。したがって、その配列は、定家の個性・好尚をよく反映していると考えられるのである。

樋口氏はこのように、左歌の重要性を指摘されながらも、右歌から左歌、あるいは右歌から右歌への展開を捨てきれない立場にある。しかし私は、右歌から左歌への展開は成立のある段階で成りえた工夫のひとつで、『源氏狭衣百番歌合』はあくまでも、左歌から左歌へと展開されるようにできたものだと考える。

II. 哀傷部の配列

ここでは、『源氏狭衣百番歌合』哀傷部の歌の配列について考察してみたい。

哀傷部は全部で3つの流れに分けられるようである。1つ目は54番から61番、2つ目は62番から66番、3つ目は67番から68番である。ひとつずつ確認していこう。⁵

① 54番から61番の流れ

この配列は各番の左歌同士と各番の左右歌が関連し合って形成されている。まずは各番の左歌同士の関連を見ていく。

【54番左と55番左】

54番

左 桐壺の御息所かくれての秋の月の夜 故院御製

雲の上も涙肉るる秋のつき以下で住むらむ浅茅生の宿

54番

左 桐壺更衣が亡くなった年の秋の月夜(更衣の里邸の寂しさを思いやって) 桐壺院

雲の上である宮中でさえ涙に暮れて秋の月が曇ってよく見えないのに、ましてあの草深い宿では、どうして月が澄んで見えるであろうか。悲しみにかきくれて過していることであろう。

55番

左 御息所おはせで後、内より鞆負命婦をつかはして、御とぶらひありけるに 桐壺更衣の母
いとどしく虫の音しげき浅茅生に露置き添ふる雲の上人

55番

左 桐壺更衣が亡くなった後、帝が鞆負命婦を遣わしてご弔問があった折に（命婦がしみじみとお悔やみを申し上げ、歌を贈った返しに） 桐壺更衣の母
ただでさえ虫の音がしきりに聞こえるこの侘しい住まいに、ますます悲しみの涙の露を置き添える雲の上の人—あなた、鞆負命婦—でございますよ。

- ・「浅茅生」という歌語の一致。
- ・歌の背景に桐壺更衣の死という事柄がある。

【55番左と56番左】

55番

左 御息所おはせで後、内より鞆負命婦をつかはして、御とぶらひありけるに 桐壺更衣の母
いとどしく虫の音しげき浅茅生に露置き添ふる雲の上人

56番

左 桐壺の御息所かくれてのち、母の許につかはしける 故院御製
宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

56番

左 桐壺更衣が亡くなった後、更衣の母君のもとに（鞆負命婦に託して）遣わした（歌） 桐壺院
宮城野—宮中—に吹き渡り萩に露を結ばせ—私の目にも涙を浮かばせ—る風の音を聞くにつけても、小萩のような若君（光源氏）はどうしているかと思いやられることです。

- ・「露置き」「露吹き」という似た歌語が見られる。
- ・歌の背景に桐壺更衣の死という事柄がある。

【56番左と57番左】

56番

左 桐壺の御息所かくれてのち、母の許につかはしける 故院御製
宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

57番

左 夕顔の露消えて後、法事に誦経せさせたまふとて、袴の腰に

泣く泣くも今日は我が結ふ下紐をいつれの世にかとけて見るべき

57番

左 夕顔が亡くなって後、(49日の)法事に、(比叡山の法華堂で)誦経をおさせになる折に、(お布施の装束の)袴の腰紐に(結びつけた歌) 光源氏

男女が結び交し、他人には解かせないという下紐、それを泣きながら今日は私が結んでいるが、いつの世か再び出会って、共に紐を解き、うち解けて逢うことができるだろうか。

・「結ふ」という歌語の一致。

【57番左と58番左】

57番

左 夕顔の露消えて後、法事に誦経せさせたまふとて、袴の腰に
泣く泣くも今日は我が結ふ下紐をいつれの世にかとけて見るべき

58番

左 葵の上かくれたまひて後

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

58番

左 葵の上が亡くなられて後(49日の喪が明けて、光源氏が左大臣邸を去った後に、手習いに「旧き枕故き衾、誰と共にか」とある所に書き付けられてあった歌) 光源氏

亡き人の魂がよいよ悲しく感じられる。共寝した床を離れがたいと思う心の習慣で。

・57番左歌の下紐を解く行為と、58番左歌の床が関連し合っている。

【58番左と59番左】

58番

左 葵の上かくれたまひて後

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

59番

左 小野にて、さま変へて

亡きものに身をも人をもなしはてて捨ててし世をぞさらに捨てつる

59番

左 小野で出家剃髪して(その翌日、手習いに書き付ける) 浮舟

我が身も人も、この世にいないものとして捨ててしまった世の中を、さらにまた出家して捨ててしまったことよ。

・「亡き」という歌語の一致。

- ・ 58番左歌は、詞書からもわかるように、葵の上亡き後、その人を想って手習いに光源氏が詠んだ和歌である。そして59番左歌も、出家を遂げた後の浮舟が、手習いに自身の心情を詠んだ歌である。歌の意味こそ異なるが、手習いという場面設定は一致している。

【59番左と60番左】

59番

左 小野にて、さま変へて

亡きものに身をも人をもなしはてて捨ててし世をぞさらに捨てつる

60番

左 頭中将ときこえし時、葵の上かくれたまひて後、大将の御方に参りたまへるに、「雨となり雲とやなりにけむ。今は知らず」と口ずさびたまふを聞きて 前太政大臣

雨となりしくるる雲の浮雲をいづれのかたとわきてながめむ

60番

左 頭中将とお呼び申し上げた時、葵の上が亡くなられて（49日の法事も過ぎた）後、大将（光源氏）の居所に参られたところ、源氏が（恋しいあの人）「雨となり雲とやなりにけむ。今は知らず」（劉禹錫の詩の一節）とくちずさまれたのを聞いて 頭中将

（亡き人を茶毘に付した煙は昇って行って雲となったが）雨となってしぐれる空の浮雲のどれをその亡き人の姿と見分けて眺めようか。

- ・ 59番左歌は、失踪した後出家した浮舟の歌であり、60番左歌は、雲となった葵の上はもうどこにいるのかわからないという光源氏の歌である。一見、関連し合っているようには見えないが、59番左歌の背景には、浮舟を探す薫が居り、60番左歌の背景には、光源氏を探されている葵の上がいる。つまり、交錯しながらも“探す”と“探される”が一致する歌なのである。また、人物は異なるものの、どちらの歌も中将との贈答歌となっており、その点でも重なる。

【60番左と61番左】

60番

左 頭中将ときこえし時、葵の上かくれたまひて後、大将の御方に参りたまへるに、「雨となり雲とやなりにけむ。今は知らず」と口ずさびたまふを聞きて 前太政大臣

雨となりしくるる雲の浮雲をいづれのかたとわきてながめむ

61番

左 夢の名残にいとど昔の御事おぼし出でて

亡き人を慕ふ心に任せても影見ぬみつの瀬にやまどはむ

61番

左 (亡き藤壺中宮との) 夢の(逢瀬の) 名残に、かえって昔の秘事を思い出されて(とりわけてご供養などしたいものだが、それも叶わないので、せめて宮と同じ蓮の上にと念じて詠んだ歌) 光源氏

亡き人—藤壺中宮—をお慕いする心そのままにお尋ねしても、あの人の影の見えない三途の川で迷うことであろうか(女は死後、初めての人に手を引かれて三途の川を渡るというから)。

- ・60番左歌は、雲となった葵の上はもうどこにいるのかわからないという光源氏の歌である。そして61番左歌は、夢に現れた亡き藤壺中宮が、生前犯した不義により苦しんでいると訴えたため、身代わりになりたいと思うが、探してもどこにいるのかわからないだろうという歌である。どちらも、“探しても見つけられない”という点で共通点が見られる。

次に、各番の左右歌の関連を見ていく。

【54番】

54番

左 桐壺の御息所かくれての秋の月の夜 故院御製

雲の上も涙肉るる秋のつき以下で住むらむ浅茅生の宿

右 飛鳥井の君うせにし秋

せく袖にもりて涙や染めつらむ梢色増す秋の夕暮

右 飛鳥井の女君が姿を消した秋に 狭衣

せき止めている袖から漏れ出た私の紅涙が染めたのであろうか。一層梢の紅葉が色増している秋の夕暮れであるよ。

- ・秋という季節の一致。
- ・左歌は、桐壺更衣を失った桐壺院の歌で、右歌は飛鳥井の女君を失った狭衣の歌である。どちらも愛する人を失った悲しみの歌である。

【55番】

55番

左 御息所おはせで後、内より鞆負命婦をつかはして、御とぶらひありけるに 桐壺更衣の母

いとどしく虫の音しげき浅茅生に露置き添ふる雲の上人

右 まどろまず明かさせたまふ夜、郭公を聞かせたまひて

夜もすがら嘆き明かしてほととぎす鳴く音をだにも聞く人もなし

右 まんじりともおやすみにならずに明かされた夜、郭公をお聞きになって 狭衣

夜通し郭公は嘆き続けている。そんなに泣き明かしている私の泣き声さえ聞く人は誰もいない。

- ・「虫の音」と「ほととぎす鳴く音」という似た歌語が見られる。

- ・左歌は、娘を亡くした桐壺更衣の母の歌で、その母を桐壺院の使いである鞍負命婦は心配する。右歌は、源氏の宮を想って一睡も出来なかった狭衣を、両親は、以前に天稚御子に連れていかれそうになった狭衣の姿を思い浮かべ、昇天してしまうのではないかと心配している。背景は少し異なるが、“歌を詠んだ人物を周囲が心配している”という点で一致している。

【56番】

56番

左 桐壺の御息所かくれてのち、母の許につかはしける 故院御製

宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

右 飛鳥井の御思ひに

夕暮の露吹き結ぶ木枯や身にしむ秋の恋のつまなる

右 飛鳥井の女君の服喪に（実際には飛鳥井の女君は道成に連れ出され流浪している） 狭衣

夕暮れに吹いて露を玉と結ばせる木枯が、それでは、身にしみる秋の人恋しさの糸口になるのであろうか

- ・秋という季節の一致。
- ・「露吹き結ぶ風」「露吹き結ぶ木枯」という似た歌語が見られる。

【57番】

57番

左 夕顔の露消えて後、法事に誦経せさせたまふとて、袴の腰に

泣く泣くも今日は我が結ぶ下紐をいづれの世にかとけて見るべき

右 飛鳥井の君、「雲の気色はそれと知らじな」と書きたるを御覧じて

かすめよな思ひ消えけむ煙にもたち後れてはくゆらざらまし

右 飛鳥井の女君が「雲の気色はそれと知らじな」と扇に書き残したのをご覧になって 狭衣

空に霞んでほしいものだ。あなたが物思いをしながら亡くなってしまった煙だとしても、あなたに立ち後れてはくすぶらないつもりだから。

- ・左歌は、詞書からもわかるように、夕顔の死を嘆く光源氏の歌で、右歌は、飛鳥井の女君が亡くなったことを知った狭衣が、その絵日記を見て詠んだ歌である。どちらも愛する人の死から数日経ての歌であり、悲しみにくれている歌である。

【58番】

58番

左 葵の上かくれたまひて後

亡き魂ぞいとど悲しき寝し床のあくがれがたき心ならひに

右 一条宮にて

塵つもる古き枕を形見にて見るも悲しき床の上かな

右 (女二の宮と若宮のいる) 一条宮で 狭衣

塵がつもる古い枕をあなたとのよすがとして見るのも悲しい、かつての共寝の床ではあるなあ。

・「悲しき」、「床」という歌語の一致。

・左歌は、詞書からもわかるように、葵の上亡き後、手習いに源氏が詠んだ歌である。一方の右歌は、女二の宮と、狭衣と彼女の子である若宮のもとを訪れている折に、手習いに狭衣が詠んだ歌である。どちらも手習いの場面で、女君への思慕を歌っている点で同じである。また、どちらも若宮が登場し、多少の差はあるが、若宮を通して姫君を思っている場面でもある。

【59番】

59番

左 小野にて、さま変へて

亡きものに身をも人をもなしはてて捨ててし世をぞさらに捨てつる

右 常盤にて、限りなりければ、さま変ふとて 飛鳥井

後れじと契らざりせば今はとて背くも何か悲しからまし

右 常盤の里で、すでに余命いくばくもなくなったので、出家をするときに 飛鳥井の女君

後れ先立つことはすまい、とあの方と約束したのでさえなかったら、今は限りと、世を背き出家をするのも何か悲しいことがあるでしょうか。

・左歌は、出家した後の浮舟の心情吐露の歌で、右歌は、出家間近の飛鳥井の女君の歌である。出家の前後であるが、どちらも出家することで俗世への執着は絶たれない。俗世へ想いを残したまま出家した、あるいは出家する女君の心が重なる歌である。

【60番】

60番

左 頭中将ときこえし時、葵の上かくれたまひて後、大将の御方に参りたまへるに、「雨となり雲

とやなりにけむ。今は知らず」と口ずさびたまふを聞きて 前太政大臣

雨となりしくるる雲の浮雲をいづれのかたとわきてながめむ

右 天稚御子の迎への時

九重の雲の上まで昇りなば天つ空をや形見とは見む

右 (狭衣の笛に感応して) 天稚御子が天上から迎えに来たとき 狭衣

九重にも重なる雲の上まで昇ってしまったら、この世に残された人々は、大空を私の形見として見るのでしょうか。

・「空」、「浮雲」「雲」、「ながめむ」、「見む」という似た歌語が見られる。

【61番】

61番

左 夢の名残にいとど昔の御事おぼし出でて

亡き人を慕ふ心に任せても影見ぬみつの瀬にやまどはむ

右 飛鳥井の君、御夢に見えければ

後れじと契りしものを死出の山三瀬川にや待ちわたるらむ

右 飛鳥井の女君が、(狭衣の) 御夢に見え (供養の御礼を述べ) たので 狭衣

生死も共に、後れたりすまい、と約束したのに、(先立ってしまったあなたは) 死出の山か、それとも三瀬川—
三途の川—で待ち続けているのだろうか。

・「みつの瀬」「三瀬」という歌語の一致。

・左歌は、亡くなった藤壺中宮が夢に現れ、苦しみを訴えるのを聞いた光源氏の歌である。右歌は、亡くなった飛鳥井の女君が夢に現れ、供養の御礼をされた時の狭衣の歌である。左歌が不遇を訴えるのに対し、右歌は感謝を述べている点では差異があるが、どちらも詠み人の想い人が夢に出てきたという設定で一致している。

このように並べてみると、54番から57番までは左歌同士の関連が強く、58番から61番は各番ごとの左右歌の関連が強いようで、左歌の重要説は否定されそうだが、しかし、58番から61番も右歌から左歌、もしくは右歌から右歌への流れは見えず、やはり左から左の流れが保たれていると考えられる。

②62番から66番の流れ

ここは、紫の上の死をテーマに歌が選ばれている。まず、61番からの関連であるが、61番左は光源氏が藤壺中宮を想って詠んだ歌である。光源氏にとって藤壺中宮は、決して叶うことない恋の相手であった。その形代として登場し、それを凌ぐ存在となったのが、藤壺中宮の姪である紫の上である。哀傷歌というテーマで、藤壺中宮の死の次から紫の上の死が始まることは、何ら不自然でなく、紫のゆかりを想起させる自然な流れであると言える。

紫の上の死は、『源氏物語』の中でも最も重要な場面のひとつで、主人公・光源氏の運命を終末へ向かわせた事件である。光源氏はここで紫の上の大切さを再確認する。歌の順序も、62番〈紫の上の病の時の歌〉63番〈紫の上が亡くなった翌春の光源氏の歌〉64番〈紫の上の一周忌過ぎの光源氏の歌〉65番〈紫の上を想う光源氏の歌〉と明確に流れが出来ている。66番については少し異質なようだが、紫の上の死という点では流れを止めていないし、67番につなげるという意味ではこの位置

に配されていることは間違いない。

紫の上の死というテーマは、『源氏物語』の構造の上からも、『源氏物語』を使って歌合せを作るとしたら絶対に欠かせない事項であろう。よって、ここは番ごとの関連や左歌の関連とは関係なく、時間を追うように左歌が選ばれ、それに関連する右歌が番えられたと考える。

各番ごとの左右の関係を見てみよう。

6 2 番

左 御悩み月ごろ経て、中宮出でさせたまえへるに、起きみたまへるを院見たてまつらせたまひて、
「今日はいとよかめり。この御前にてはこよなきにや」ときこえさせたまひければ 紫の上

おくと見るほどぞはかなきともすれば風に乱るる萩の上露

右 中宮にいまだおはしましそめざりし時

いつまでとしらぬながめの庭潦うたかた逢はで我ぞ消ぬべき

6 2 番

左 (数年前の大病以来体調がすぐれなかった紫の上に死期が迫り) ご病気が数ヶ月に渡って、中宮(紫の上が養育した明石の中宮)が(紫の上の住む二条院に)退出なさったときに、(紫の上が)起きていらっしやるのを六条院(光源氏)が見もうしあげなさって、「今日はたいそう体調がよいようですね。この方(中宮)の御前は格別なのでしょうね」と申し上げなさったので 紫の上

私が起きているとご覧になってもそれは束の間のことです。露が置いたと思う間もなく、ややもすれば風に乱れる萩の上露のように、あっけなく消えてしまうことでしょう。

右 中宮(式部卿宮の姫君)にまだお通いになられていない頃(東宮入内の話もあることを知って) 狭衣

いつまでも在るとも知らない、長雨でできた庭の水たまりの泡のように、ほんの少しの間でもお逢いすることもできずに、私は消えてしまうのでしょうか。

- ・左歌は、体調のよくない紫の上が、自分の命は萩の上露のように消えてしまうだろうと詠んだ歌である。右歌は、狭衣が想いを寄せている宰相中将の妹が、東宮入内の可能性もあることを知り、狭衣は、逢うこともできず水たまりの泡のように消えてしまうのだろうと詠んだ歌である。歌の背景は異なるものの、どちらの歌も“水のように消えてしまう”という意味で一致が見られる。

6 3 番

左 紫の上かくれたまひて後、六条院の御前の花盛りに
今はとて荒らしや果てむ亡き人の心とどめし春の垣根を

右 飛鳥井の君、行方なくなりて後

しきたへの枕ぞ浮きてながれける妹なき床の秋の寝覚めに

63番

左 紫の上がお亡くなりになって後、(光源氏は深く喪に服している折で) 六条院の(春の町の) 御前の花が盛りと咲いているときに

光源氏

今はこれまで、と荒れはてさせてしまうのだろうか。亡きあの人(紫の上)が丹精こめて作った春の庭を。

右 飛鳥井の女君の行方がわからなくなって後 狭衣

あふれる涙で、枕も浮いて流れてしまった。愛するあなたの居ない床での秋の寝覚めに。

・左歌、右歌ともに愛する人を失った直後の歌で、その大きな悲しみを歌っている。

64番

左 紫の得うかくれたまひて後、九月九日

もろともにおきぬし菊の朝露もひとり袂にかかる秋かな

右 飛鳥井行方なくなりて後

思ひやる心いづくに逢ひぬらむ海山とだに知らぬ別れに

64番

左 紫の上がお亡くなりになって、(一周忌が過ぎて後の) 九月九日(重陽の節句)に 光源氏
かつては一緒に起きて過し、長命を祈った菊の(着せ綿の)朝露も、今は、1人袂にかかる涙の露となってしまった秋ではあるなあ。

右 飛鳥井の女君の行方が知れなくなって後(道成の弟、道季が入水を知って報告してからは水底まで尋ねたい気持ちが絶えないで) 狭衣

あの人を思いやる心はどこであの人に逢うことができたろうか。海とも山とも行く先の知れぬ別れで。

・63番とは異なり、愛する人を失って幾日か絶った後の歌である。直後の激しい慟哭は、大切な存在の欠けたしみじみとした惜別の涙に変わっている様子が窺える。

65番

左 うへ、かくれたまひて後

大空を通ふまぼろし夢にだに見え来ぬ魂の行方尋ねよ

右 高野にて、聖尋ねえさせたまひて

ありなしの魂の行方をまどはさで夢にも告げよありしまぼろし

65番

左 紫の上がお亡くなりになった後(時雨を見て悲しくなり、また常世の使者でもある雁を羨ましくも思われ、つい目をやって)

光源氏

大空を通う幻術士よ、夢にさえも現れてこない亡き人の魂の行方を探しておくれ。

右 高野山で（飛鳥井の女君の兄である）聖に会うことがおできになって 狭衣

（飛鳥井の女君の）生き死に、魂の行方をまどわさずに、夢でよいから告げておくれ、（粉河で）出会った幻術士（兄僧）よ。

- ・「まぼろし」、「夢」、「魂の行方」という歌語の一致。
- ・左歌は名高い歌であるが、右歌とともに、幻術士に愛する人の魂を探して欲しいと欲する歌である。左歌は中国の「長恨歌」を意識しているが、右歌も同様であろう。

66番

左 紫の上かくれたまひて後、六条院に 前太政大臣

いにしへの秋さへ今のこちしてぬれにし袖に露ぞ置き添ふ

右 飛鳥井亡くなりて後、常盤におはして

秋の色はさもこそ見えめ頼めしを待たぬ命のつらくもあるかな

66番

左 紫の上が亡くなられた後、六条院（光源氏）に（昔、葵の上—頭中将の姉、光源氏の妻—の亡くなったのも今頃であった、としみじみと思いのこもる文を差し上げて） 頭中将

昔、あの方（葵の上）が亡くなった秋のことも今のこのように思われ、お亡くなりになった方（紫の上）を追悼する涙で濡れている袖にまた涙の露を添えております。

右 飛鳥井の女君が亡くなった後、（今姫君の母代から得た情報で）常盤殿においでになって（遺児など、全ての事情を知って）

狭衣

秋の木々の色はそのように移ろって見えるものであろうが、（私は不変の愛を約束して）頼みに思わせたのに、それを待たないで逝ってしまった命のなんと冷酷なことよ。

- ・秋という季節の一致。
- ・左歌は、紫の上の死を通して頭中将が昔（葵の上の死）を想起した歌であり、右歌は、飛鳥井の女君の死によって昔（飛鳥井の女君が心ならずも連れ去られたこと）を想起している女房を話を聞いた狭衣の歌である。少し異なるようだが、歌を詠んだ人物が昔を回顧するという点では共通点が見られる。

③67番から68番

67番

左 病限りになりて後、女三の宮に 柏木の権大納言

今はとて燃えむ煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ

右 限りなりけるころ 飛鳥井

消えはてて煙は空にかすむとも雲の気色はそれと知らじな

67番

左 (女三の宮との密通による) 病で、余命が無くなった後、女三の宮に (ひそかに贈った歌) 柏木
今は最期であるというので、私の骸も茶毘に付され煙となりましようが、その煙ももつれ合って、絶えぬ物思
いの火がこの世に残るでしょうか。

右 (常盤の里で) 今は命の限り、となった頃に 飛鳥井の女君
(私が) 消え果て (火葬の) 煙は空に霞むとしても、その雲の様子を、あなたは、それ (私の変わった姿) だ
とは気づかないでしょう。

68番

左 心からこの世を限りに思ひ捨てける夜 浮舟
鐘の音の絶ゆるひびきに音を添へて我が世尽きぬと君に伝えよ

右 常盤の山里にて、限りにおぼえければ 飛鳥井
ながらへてあらば逢ふ世を待つべきに命は尽きぬ人は訪ひこず

68番

左 自分から今生の終わりと思ひ捨てた夜に (誦経の鐘の音が風に乗って聞こえてくるのを聞きながら母あ
ての返事を書いて) 浮舟

鐘の音の絶えてゆく響きに泣く音 (声) を添えて、私の命は終わった、と母君に伝えてください。

右 常盤の山里で、今は命の限り、と思ったので 飛鳥井の女君
生き長らえてこの世にあるならばあの人と逢う世を持つこともできましようが、命はいままさに尽きようとし
ていて待っているあの方は訪れては来ないのです。

67番は一見したところ、66番からの関連性はないように思えるが、66番左の作者が柏木の父
である前太政大臣 (頭中将) であることから、流れが見えないわけではない。

67番は

- ・「煙」という歌語の一致。
- ・左歌は、女三の宮を残して先立つ柏木の歌であり、右歌は、狭衣を残して亡くなる飛鳥井の女君の
歌である。どちらも愛しい人を残してこの世を去る無念の歌である。

また、67番左と68番左は、

- ・「絶えぬ」「絶ゆる」という似た歌語が見られる。

そして、68番では

- ・「我が世尽きぬ」「命は尽きぬ」という似た歌語が見られる。

・左歌は、薫と匂の宮の間で悩む浮舟が、命を絶つ決意をした歌で、右歌は、飛鳥井の女君の臨終間近の歌である。どちらも自分の命がもうほとんど無いことを伝えようとしている歌である。

しかし、これ以上にこの2首はやはり哀傷歌としては外せない2首であろうと思われる理由が、『無名草子』に見られる。まずは、67番左の柏木の歌について

また、柏木の右衛門督の失せのほどのことどもこそ、あはれに侍れ。女三の宮に文奉るとて、手もわななけば、思ふこともみな書きさして、

今はとて燃えむ煙もむすぼほれ

絶えぬおもひのなほや残らむ

と詠みて『あはれとだに宣はせよ。心のどめて、人やりならぬ闇に惑はむ道の光にもし侍らむ』とある御返りに、

立ちそひて消えやしなまし憂き事を

おもひみだるる煙くらべに

とて、『遅るべくやは』とある女宮ぞ憎き。（『無名草子』P47）

と、柏木の歌は「あはれ」とし同情しながらも、それに対する女三の宮は「憎き」と非難している。

また、68番左の浮舟の歌

については

手習の君こそ、憎きものとも言ひつべき人。さまざま身を一方ならず思ひ乱れて、

鐘の音の絶ゆる響きに音をそへて

わが世尽きぬと君につたへよ

と詠みて、身を捨てたるこそいとほしけれ。（『無名草子』P34）

と、浮舟を憎らしい人とも言えそうだが、「鐘の音」の歌を詠んで宇治川に投身したのは可愛そうだと同情している。

『無名草子』は、藤原俊成女（実際には俊成の孫）の作と言われている。しかし、その名からもわかるように、俊成卿に大変可愛

がられ、俊成卿の家で過した。定家とは伯父と姪の関係になるが、『無名草子』にも定家らしき人の名が見えることから、俊成の

もと、2人で文学の知識を磨いたのだろう。とすれば、俊成女の作品観と定家の作品観は似たもの、もしくは定家が俊成女に話し

たとも考えられる。であるから、この哀傷部最後の2首は、定家にとって欠かせない秀歌として配されたものではないだろうか。

Ⅲ. 『源氏狭衣百番歌合』の成り立ち

以上のように、『源氏狭衣百番歌合』の哀傷部について検討してきたが、ここでは明らかに『源氏物語』の歌が尊重されていることがわかる。そしてここから言える『源氏狭衣百番歌合』の成り立ちについてまとめてみたい。

膨大な量のものを作成する時、やみくもに順番に作るより、何か根幹となるものがあれば作業は進みやすい。それは、本作品においても言えることで、良経に、物語で歌合を作ることを依頼された時、定家もまず『源氏物語』の歌で秀歌と思われるものを100首以上選び出したと思われる。それは、『源氏物語』に造詣の深かった定家なら当然のことであるし、『源氏物語』の歌を大切にしている定家（俊成の教え）にとって、『源氏物語』の勝は決まっていたからだ。次にそれらの歌を歌語や歌の背景から順に並べていった。そして、その並べられた歌に関連する歌を、『源氏物語』の次に評価すべき『狭衣物語』の中から選んで番えていきながら、順序を考慮し、時に右から左へつまり、『狭衣物語』から『源氏物語』へと繋がる流れを形成していったり、『源氏物語』や『狭衣物語』の本文を見合わせながら歌を変更していったであろう。そして、最後に部立を作り、完成に導いたのだ。つまり、

1、『源氏物語』の中の秀歌を100首以上選ぶ

↓

2、1を順に並べる

↓

3、2に合う『狭衣物語』の歌を選ぶ

↓

4、歌を精査し、順番を並べ変える

↓

5、部立の構成

↓

6、完成

という流れで『源氏狭衣百番歌合』は出来たと仮定される。要するに、『源氏狭衣百番歌合』は『源氏物語』の勝が決まりながらも、それを直接示すのではなく、さまざまなトリックによって読者をその方向へと導く歌合なのだ。

おわりに

ここまで、『源氏狭衣百番歌合』を配列の観点から考察してきた。それによると、左の『源氏物語』の歌は歌同士が密接につながり合い、先の歌が次の歌を引き出す役割を果たしているが、右の『狭衣物語』の歌はそのほとんどが、左の『源氏物語』と番えられたもので、『狭衣物語』の歌同士がつながりを持つものは少ないということが考えられる。この論では、哀傷部の歌を取り挙げて検証したが、

左の『源氏物語』は見事なまでに意味を持って全てがつながったが、右の『狭衣物語』は、“飛鳥井の女君”という大きなテーマで歌がつながる以外、ほとんどつながりが見られなかった。

これらの事実から、『源氏狭衣百番歌合』は、まず『源氏物語』の中の秀歌を百数十首選ぶことから始まったのだろう。それを並べた上で、番えるにふさわしい『狭衣物語』の歌を選び、歌を精査し、並べ替えをしながら部立を形成し、完成に導いたと推測する。つまり、『源氏狭衣百番歌合』は『源氏物語』を勝とする歌合なのではないかと結論することができるのだ。

本稿は、修士論文の一部を改定し作成したものであり、紙幅にも限りがあるため全ての歌について考察するまでに至らなかったが、この点に関しては今後の論稿に期したい。

註

¹ 山岸徳平「源氏物語研究の初期」（『国語と国文学』1925年）及び、久曾神昇「源氏物語の歌合（上）（下）」（『国学院雑誌』1928年3・4月）に寄る。

² 竹本元兎・久曾神昇『定家自筆本物語二百番歌合と研究』（未刊国文資料刊行会 1955年）

³ 『新編日本古典文学全集 狭衣物語①』付録、冷泉家時雨亭文庫蔵『物語百番歌合（源氏狭衣歌合）』より引用。以下、歌とその口語訳は全てこの書より引く。

⁴ 樋口芳麻呂「『物語二百番歌合』の配列」（ひたく書房「平安・鎌倉散逸物語の研究」1982年）

⁵ 歌と口語訳は³の通り。口語訳については便宜上、前出したものは省略した。